# 書評

## 山室信一・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『われわれはどんな「世界」を生きているのか ―来るべき人文学のために』（ナカニシヤ出版、二〇一九年）

小野寺　拓也

タイトルを見てもわかるように、本書には二つのテーマがある。一つは、「われわれはどんな「世界」を生きているのか」、言い換えれば、われわれが生きている時代は「いつ」始まったのかということ。もう一つは、歴史学を含む人文学とはどのような営みであり、その「危機」を今後いかにして乗り越えていけるのかということ。もちろんこの二つの問いは密接に絡み合っている。いまわたしたちがどこに立っているのかが分からなければ、それに対する処方箋など示しようもないからだ。

自分たちがいまどこに立っているのか、実のところよくわからない。これこそが、人文学に限らずわたしたち研究者が直面している最大の問題ではないだろうか。そのことを、山室信一は正直に認める。「そもそもどこに問題があり、それに対する解決方法が分からないままに戸惑い、漂っているというのが実情であろう。このような「世界」の状況を直視するとき、私たちは為す術もないまま、無力感にとらわれて立ちすくむしかない、という思いに沈み込む」（本書一〇頁）。

これまでの知見が（少なくともそのままのかたちでは）何ら有効ではない世界に、わたしたちは生きているのかもしれない。そう認めるのは勇気のいることだ。しかしそれを直視することなしに現状に対する有意味な分析など不可能であるし、跋扈する人文学無用論に反論することは到底叶わないであろう。

こうして本書はおもに前半部で、われわれがいま抱えている諸問題を取り上げる。ビッグデータや人工知能による社会や人間のコントロール（第二章）。均質な「人民」を前提とした国民の政治的意見を政党が媒介し、選挙を通じて民意を議会に反映させるという古典的な民主主義の行き詰まり（第三章）と、ポピュリズムの隆盛（第四章）。議論ではなく、相手を攻撃するための手段と化してしまった歴史認識論争（第一〇・一二章）。

また、私たちがいま抱えている問題には、そうした近年のものだけでなく、一九七〇年代以降に登場しながらいまだに解決されていないものが少なくない。前衛音楽がその「賞味期限切れ」を起こす（第六章）、ニューディール体制や総力戦体制によってつくられた、集団・組織に依拠した社会が個人化の進展によって終焉を迎える（第七・九章）、精神医学からフロイトの「抑圧」が消滅し始める（第五章）といった論点が、本書では取り上げられる。後期近代、「第二次グローバル化」が引き起こした諸問題に、私たちはまだ処方箋を見つけられずにいるのであり、この時期にヨーロッパで前景化した移民の統合と環境問題という二つのテーマがいまだに世界が抱える最大の問題であることは、論を俟たない。

その意味で、第八章で取り上げられている核問題とE・P・トムスンによる平和運動はやや異質ではある。冷戦によって始まったこの問題はほかの諸問題とはタイムスパンが異なるからだ。だが、アメリカによるINF条約の破棄、東アジアで依然として続く対立構造と核問題を考えれば、これも一つの「いま」であることは間違いない。

そしてそうした「いま」との格闘の中から、それぞれの研究者が人文学に込める想いや現状に対する処方箋が見えてくる。「ジェノサイド」という「言葉が発揮する圧倒的な喚起力と訴求力」によって犠牲者ナショナリズムが誘発され、かえって集団間の対立激化をまねているという現実をまずは直視する（第一〇章）、歴史認識の対立をめぐっては、現在の価値観にこだわるのではなく当時の歴史の現場に立ち返る（第一二章）といった指摘は、歴史研究者として当然首肯できるものである。

さらに本書の後半になると、それぞれの研究領域を実例として、人文学とはどのような営みなのかという考察が展開されるようになる。中国という「他者」にたいする日本の研究者たちによる認識の揺れ（第一一章）、レナル／ディドロ『両インド史』のパラグアイ布教区に関する記述の読み解き（第一三章）、モデルネの時間感覚（第一四章）、対象を支配し、操作し、変換するというやり方とは異なる研究者の営み（第一五章）、社会的に底辺にいた人びとによる言説の点描（第一六章）といったテーマが取り上げられる。そうした記述を通して、それぞれの研究者の「処方箋」が提示される。言説を徹底的に当時の文脈の中で読解し、歴史過程の「根本的な偶発性」を明らかにする（第一二章）、「情報ゴミ」として社会にうずたかく積み上げられている言葉を強靭な言葉へと紡ぎ上げていく（第一六章）といった方向性は、歴史研究者の多くが共感するものであろう。

このように本書は全体として、わたしたちが「いま」抱

えている問題が未曾有のものである（かもしれない）ことを認めた上で、その解決の手がかりを過去に探るという構造になっている。しかしこれは、（少なくとも論理的には）奇妙なことではある。もちろん、「起きた事象に関する事実の集積から着手するしかない」（二四頁）という人文学固有の事情はある。だが、いま未曾有の問題を抱えていてその解決の糸口も見つからないのであれば、これまでの知見が役に立つとは考えにくい。しかも第六章で岡田暁生が辛辣に指摘しているように、過去を参照するという行為には、「既に知っている何かが理解の手がかりとしてでてくる」ため、何かを「分かった気に」させる以上の効果は実はないのかもしれない（一二五頁）。

だがそれに対する答えは、「おわりに代えて」の箇所に書かれている。「「過去の世界を見る」ことによって、人は今日の自明の非自明性に気づき、ひいては未来における別世界の可能性に思いを馳せる想像力を獲得する」（三六四頁）。「歴史学の使命の一つとは恐らく、今日から見れば一見些末あるいは無意味とも思えるような過去の事実のパーツを過去という名のおもちゃ箱から探し出し、それを元に新たな未来像を間接的に指し示し、あるいは構成しなおすことにあるはずである」（三六五頁）。

もちろんここで言う「未来像」とは科学的な予想ではなく、「一種の思考実験モデル」（三六六頁）であるが、そうしたモデルがあってこそ、「いま」「ここ」を無批判に受容するのではない別の選択肢が見えてくるのだという指摘には共感できる。「未来を示唆することを恐れない」こと。それが、「価値付け＝意味づけを恐れない」「物語形式こそ人文学の生命線だと認識する」ことと並んで今後とも人文学の前提となるだろうという提言には、評者も基本的に賛成である。

「基本的に」と留保をつけたのには、二つ理由がある。一つは、こうした言説がややもすると人文学の「揺り戻し」をまるごと肯定しているように受け取られるのではないかという危惧である。長谷川貴彦が指摘するように、戦後における日本の歴史学はおおよそ以下の四つの段階を踏まえて進展してきた。①マルクス主義的な政治的進歩主義、発展段階論・経済還元主義。②実証主義と結びついた社会史研究。③思想・文化のもつ規定性を重視し、言説の自律性、言説＝実践による社会の構築を主張する、ポスト構造主義・言語論的転回。④エイジェンシー（行為主体性）、パーソナル・ナラティブ、情動を重視するポスト言語論的転回[1]。「語る主体」を復権させ、物語を重視するようになった近年のポスト言語論的転回は、一見すると「人間とは何か」という人文学の永遠のテーマに回帰しただけのようにも見

える。しかしそれは、「言説、自己と主体性（主観性）、経験と実践といった諸概念を構造主義の隘路から救い出す」[2]という、言語論的転回との格闘の末に生み出されたものであることを忘れてはならないだろう。スクリプト、パフォーマンス、「経験」といったポスト構造主義によって指摘された要素を認めつつも、しかしそれでも消去しきれないエイジェンシーに着目するのがポスト言語論的転回なのであり、そこでは言語的なアプローチ、脱構築というポスト構造主義の手法も援用しつつ、「大きな物語」の書き換えを迫ろうとしている。

したがって、「語る主体」をただ復権させ、恐れることなく意味づけを打ち出せばよいというものではない。第一一章で小野寺史郎が適切に指摘しているように、議論を研究史として整理し着実に積み重ねていかなければ、わたしたちは同じ誤りを犯したり同じ議論を繰り返したりすることになるだろう。人文学が「学」として今後も存続していくためには、基本方針を確認しあうだけでなく、着実に何かを「積み上げ」ていくしかない。「わかりやすい物語を特定の価値観に基づいて発信し、安易に現状診断や未来予測を行う」のがポスト・トゥルース時代に行き渡っている言説であることを、研究者は決して忘れてはいけないだろう（その意味で、わからないことをわからないと認める勇気はきわめて重要である）。

この問題を考えるとき、つねに脳裏をよぎるのは磯前順一の次の言葉である。

「学問の客観性とは、みずからの歴史性、主観的制約を引き受けたときに、その対象化の過程で確保されるものであろう。みずからの主観や感情を排除したところで唱えられるような客観性は、研究者自身の身体性を含めた日常の生活世界の外部に自分が立っているかのような幻想のうえに成り立っているものにすぎない」[3]。

「みずからの歴史性、主観的制約」を引き受けたうえで、その対象化の過程で学問としての客観性を確保するというギリギリの営み。そのような営みが成功しているかどうかは、最終的には個別の研究ごとに判断せざるを得ない。もう一つの留保とは、さきほどの三原則を満たしているから問題ない、というような「静的」な学問では、人文学はおそらくないということだ。どこに答えがあるのかもわからない状況でもがき苦しむ中で、ようやく「均衡点」らしきものが見いだせた時、その営みはおそらく成功と言えるのだろうが、しかしその均衡点は多様な読み手のあいだでの折衝によってさまざまに変動する「動的」なものでもある。そして、書き手が「一歩踏み出す」その歩幅が大きければ大きいほど、読み手のあいだでの「均衡点」の揺れ幅もよ

り大きなものとなる。

その意味で、本書で強い感銘を受けたのが、田辺明生（第三章）と小関隆（第八章）の論考であった。「人民（ピープル）」という均質化された一つのまとまりが国家主権をもつという理念が有効性を失いつつあるなかで、階層・人種・民族・出自・ジェンダー・セクシュアリティ・宗教・言語などの多元的な軸によって人びとが差異化されたままに、いかにして「関係性の政治」が可能となるのか。そこで田辺が提唱するのが、「方法としての主体」、「可能性としての他者」である。評者が理解するところによれば、それは自らの帯びた属性を絶対化するのではなく、いったん引き受けつつも他者との関係のなかでその権力性や問題性に気づき、みずからを変容させていくこと、同じように他者の属性も絶対視することなく、別の現れをもちうる存在として理解するということになる。

小関は、歴史家トムスンによる反核運動の言説を取り上げる。そして、長いパースペクティブのなかで現在と未来を捉え、歴史研究から得られる（人間の意図はしばしば裏切られ、予想外の結果を生むという）知見を生かして「予言」を行うということも歴史研究者に求められているのではないかと、小関は主張する。

正直なところ、いずれの議論にも違和感はある。田辺の主張は理想としてはもちろんその通りであろう。しかし田辺自身が認めているとおり、「こうした人びとの集まりが群れの力に酔って、自分自身が内包する差異や権力性を忘れ、われわれこそが人民であると宣言するとき、そこに排他的なポピュリズムが生まれることもある」（六五頁）。そして、今まさに世界でそうした動きが問題となっている。ジグムント・バウマンの次の議論も改めて思い出す。

「自我の新たな「不確実性」を実践し享受する者は、それを「自由」として語りがちである。けれども、アイデンティティが常に「追って通知のあるまで」のものにすぎないという不安定な状態にあるとは、自由であるというより、決して勝利で終わることのない解放戦争に強制的に徴兵され、いつまでもその状態に置かれているということであると言ってみることもできるだろう。来る日も来る日も、脱却、清算、忘却のための戦いがあり、休ませてはもらえない」。「進んで自由な選択にともなうリスクと困難へ自分をさらすことによって安心・安全を獲得・維持していくことを望む人がいる。こういう人は、アイデンティティが曖昧さを残し、定まりきってないことのメリットを強調しがちである。アイデンティティは固定されず、不完全なままで、拡張可能である方がよい。とにかく簡単に破棄したり、変更できる方がよいと考えるのである。それに対し、アイデ

ンティティ戦争の影響を被る側の人びとは、無理矢理ステレオタイプを押しつけられ、精神的な苦痛に苛まれている。自分がいいと思う選択肢は、手の届かない遠いところに置かれている上、自分の状況があまりにも不安定なので、ゲームのルールを変えることをまじめに考える余裕すらない。こうした人びとは、アイデンティティを生まれながらの権利、ぬぐい去ることのできない刻印、あるいは奪われることのない所有物であると見なしがちである[4]」。

そして小関の認めるとおり、歴史家は通常「予言」を慎む。歴史学から得られる知見はさまざまあるにせよ、歴史には数多くの偶然性が付きものであることを知っているからこそ、未来がオープンであるという事実を前に歴史研究者は口をつぐまざるを得ないのである。しかも、トムスンの予言は（幸運なことに）的中しなかった。

しかしここで話は前に戻る。人文学の役割が「一種の思考実験モデル」を提供することにあるのなら、いま現実には難しい理想像も、ひょっとすると到来してしまうかもしれない未来像にも少なからず意味はある。私の違和感をひとまず括弧に入れれば、これも人文学の重要な営みではあるのだ。

以前、「歴史学はデパートのようなものだ」という言葉を聞いたことがある。それぞれの専門店が基本的には好き勝手なことをやっているが、店舗としては「歴史学」という一つのまとまりを維持している、という趣旨であったと記憶している。

「なんでもあり」の多様性と、人文学を貫く淡い共通軸とのはざまで、わたしたちはともに何を守り、創っていくべきなのか。歴史学を軽んじる新自由主義的な何かと、別の意味で歴史学を軽んじる「ポスト・トゥルース」に挟まれている私たちは、これからもその答えを必死に模索していかなければならない。

**註**

（1）長谷川貴彦『現代歴史学への展望―言語論的転回を超えて』（岩波書店、二〇一六年）。

（2）同書、一〇四頁。

（3）礒前順一、「石母田正と敗北の思考―一九五〇年代における転回をめぐって」、安丸良夫・喜安朗編『戦後知の可能性―歴史・宗教・民衆』（山川出版社、二〇一〇年）所収、三三―六六頁、ここでは六一頁。

（4）ジグムント・バウマン、長谷川啓介訳『リキッド・ライフ―現代における生の諸相』（大月書店、二〇〇七年）、六二、七〇頁。

（東京外国語大学　世界言語社会教育センター　特任講師）